アジサイの七変化

東日本特有のシトシト降りの雨に濡れて、季節の花アジサイた。紫陽花の花の色は白に薄く緑がかけられ赤や青に色づき赤紫や青紫・・と七変化する。同じ花でも色が移ろい、同じ木のなかでも色違いともなる。花には色を作り出す4大色素があるという。

黄緑野菜のカロチンで知られるカロチノイド、緑の元祖であるクロロフィル、黄色から赤紫をだすベタレイン、そして最も不思議な色の演出者、白から赤、青、紫まで作り出すフラボノイドである。白い色を出すフラボン、難解な青やスミレの青紫や深紅の赤を演出し、紅葉の主役ともなるアントシアニンという不思議の色の元締めが含まれている。この不思議な色素が古くからナゾとされてきたアジサイの花の色の七変化のナゾを解く鍵となった。

色変わりは花の細胞の成長と老化が原因。成長すると薄い緑に青や赤味を増し、老化によって老廃物がたまり酸性となるとまた色変わりする。色の不思議な演出者アントシニアンのサジ加減ひとつで青から赤、枯れた褐色まで色を変えることができるという（アジサイはなぜ七色に変わるか?」武田幸作著、PHP研究所。意外でもあり納得もする。

なかでも青色は古くからナゾが多くその神秘性から人々を魅了しつづけていた。黄金のマスクで有名なエジプト、ツタンカーメン王の墓に納められていた棺の中からは、美しいヤグルマギクの花飾りとパピルスに織りこまれたヤグルマギクがでてきた。

三三〇〇年の悠久の時を越えて取り出された花はまだ青色を保っていたという。青色は稲光の青と結びつき魔力と神秘の象徴となり、かつてドイツの国花でもあった。ドイツの女性の目はヤグルマギクの花の色に喩えられ、神秘の青い色のナゾは深く、青の色のメカニズムの探索と青い花の精の結晶抽出は歴史のテーマだった。

青の色素の結晶を初めて取り出したのはいまから四〇年前、日本の科学者、どこでもあるツユクサの青い花からだった。万葉の時代はツキクサと呼ばれ摺り染めの染料として身近にあった日本そのもの花である。路傍の野草ツユクサの可憐な青い花や矢車草にそんな神秘性と話題性があったとは知らなかった。

（村松　照男）